

## 企画展「お殿様の御刀拝見」展示資料一覧

	『御佩刀記録』分類	名称	刃長	御佩刀記録に見える由緒など	御佩刀記録記載順	折紙代付	所蔵
1	一之御箱	片鎌槍 銘 廣正	26.7cm	隆芳院様(3代忠昌)御持	御刀之部 37番目		越葵文庫
2	一之御箱	短刀 銘 行平作	22.3cm	大安院様(4代光通)御直筆有之	御小脇指之部 25番目	千貫折紙 元禄十二卯年九月	越葵文庫
3	一之御箱	短刀 銘 波平安行 附・蝟色塗合口拵	28.5cm	宝曆九卯年四月朔日 惇信院様(将軍家重) ㇵ 隆徳院様(12代重富) 御内御登城之節御拝領 文化十四丑年十一月三日	御小脇指之部 8番目	金拾五枚折紙 宝曆九卯年正月	越葵文庫
4	一之御箱	短刀 銘 国光 附・蝟色塗合口拵	24.7cm	文恭院(将軍家斉)様 ㇵ松栄院様(浅姫・家斉女 ㇵ 承室) 御縁組被仰出候節 威徳院様(13代治好) 御拝領	御小脇指之部 12番目	金三拾枚折紙 文化十四丑年霜月	福井市春嶽公記念文庫
5	一之御箱	太刀 銘 恒次	70.9cm	天保九戌年 慎徳院様(将軍家慶) ㇵ 慶永公御拝領	御刀之部 32番目	金百枚折紙 天保九戌年	福井市春嶽公記念文庫
5 附	一之御箱	折紙(恒次太刀)					福井市春嶽公記念文庫
6	超倫院様御指料	短刀 銘 アリホウシ(有法師) 附・白革包懐剣拵	21.5cm	元禄二巳年六月七日 献上 稲葉采女	御小脇指之部 38番目	金五枚折紙 天和三亥年二月	越葵文庫
7	古御指料	短刀 銘 兼道作 天正三年八月日 附・青貝微塵変わり塗短刀拵	28.5cm	麗照院様(11代治好正室定姫) 御指か	御小脇指之部 40番目		福井市春嶽公記念文庫
8	殿様御指料(春嶽公所用)	刀 額銘 信国 脇指 銘 相州住廣正/宝徳元年十月日	69.4cm 35.5cm		殿様御指料御刀之部 6番目 殿様御指料御脇指之部 3番目		福井市春嶽公記念文庫
9	殿様御指料(春嶽公所用)	鯉鱗包大小拵					福井市春嶽公記念文庫
10	殿様御指料(春嶽公所用)	脇指 銘 備州長船□□/永享六年二月日 附・蝟色塗小さ刀拵	60.0cm		殿様御指料御刀之部 27番目		越葵文庫
11	殿様御指料(春嶽公所用)	脇指 銘 備前國住雲重/応安三年六月日 附・変わり塗脇指拵	41.2cm		殿様御指料御脇指之部 1番目	金五枚折紙 元禄十四己年八月	越葵文庫
12	殿様御指料(春嶽公所用)	脇指 無銘 信国 金象嵌銘 寛永二二(四)年八月廿一日袈裟落 附・変わり塗脇指拵	50.9cm		殿様御指料御脇指之部 22番目		越葵文庫
13	天梁院様(齊承公)御指料 (⇒春嶽公所用)	刀 無銘 来国光 脇指 銘 信国	63.1cm 38.5cm		御刀之部 56番目 御脇指之部 8番目	金三枚札	福井市春嶽公記念文庫
14	天梁院様御指料 (⇒春嶽公所用)	石地塗葵紋散半太刀大小拵					福井市春嶽公記念文庫
15	超倫院様御指料 (⇒春嶽公所用)	太刀 銘 康光 脇指 無銘 藤島	74.2cm		御刀之部 75番目 御脇指之部 24番目		福井市春嶽公記念文庫
16	超倫院様御指料 (⇒春嶽公所用)	栗色革包半太刀大小拵		鐺のみ入替⇒「亀甲形洞透金象眼」 …「西岸院様(2代忠直)御指」元禄十二卯年三月廿三日 西岸院様御指被遊候由二而大坂二有之候ヲ御調ヒ候由」	鐺…鉄御鐺之部21番目		福井市春嶽公記念文庫
17		十文字槍 無銘 (伝三条小鍛冶 月刃)	30.8cm		十文字御鍔之部 12番目		越葵文庫
18		槍 南蛮形	16.5cm		十文字御鍔之部 9番目		越葵文庫

## 用語解説

【折紙】 (おりがみ)	刀剣の折紙とはいわゆる鑑定書のこと、奉書紙に刀の銘、寸法、特徴など、これが正真であるという文言、代付（評価額）、年月日が記載され、鑑定者である本阿弥家当主の花押が記される。代付では「金●枚」という単位がよく使われているが、金一枚は大判1枚=小判10両である。比較的古い時期の折紙には金ではなく「〇〇貫」と銭での金額を記載したものもある。この場合は銭二十貫=金一枚=小判10両となる。小判1両の価値は江戸時代を通じてかなり変動しているが、5万円～10万円程度と考えると大過はないものと思われる。仮に1両=10万円で計算すると、金百枚=1億円、銭千貫=金五十枚=5,000万円となる。ちなみに『御佩刀記録』記載の代付の最高額は「正宗」小脇指の金三百枚。
【指料】 (さしりょう)	「その人が腰に差していた刀」の意。
【芝引・胴金】 (しばひき・どうがね)	芝引は太刀の鞘の末端部分、胴金は鞘の中央部分を保護するために取り付けられた金具。
【鏰】 (はばき)	刀身と鐔が接する部分に装着する金具。「鞘走留（さやばしりどめ）」とも呼ばれ、刀を鞘に納めた際、鞘の鯉口に密着して刀が鞘の内部で動揺しないよう固定する役割がある。
【切羽】 (せっぱ)	鐔を表裏両側からはさむ薄い楕円形の金具で、鐔が動揺しないように固定する役割をもつ。
【鷓目】 (しとどめ)	紐を通す孔の縁を飾る金具。刀の場合は下げ緒を通す「栗形」の孔を装飾する金具。鳥の鷓（しとど）の目の形に似ていることからこの名がある。
【縁・頭】 (ふち・かしら)	縁金具は柄の鐔側、頭金具は柄の端部をそれぞれ保護する金具。共通の意匠で統一することが多いことからあわせて「縁頭」と呼ばれることが多い。
【栗形】 (くりかた)	鞘の鯉口ちかくに付けられた、下げ緒を通すための突起。栗を半分に割ったような形をしている。
【裏瓦】 (うらがわら)	鞘に小柄小刀（こづかこがたな）が付属する場合、小柄を装着する孔「小柄櫃（こづかびつ）」の入口を補強するために付けられる金具。
【小尻】 (こじり)	鞘の端部のこと。鐔とも表記する。
【赤銅】 (しゃくどう)	銅に金3～4%、銀約1%を加えた合金。青みがかった黒色を呈する。
【四歩一】 (しふいち)	銅と銀の合金。光沢のある銀灰色を呈する。「四分一」とも表記する。銀の比率が約1/4であることから。臙銀（おぼろぎん）ともいう。
【七子】 (ななこ)	「魚々子」とも表記する。金属の表面に魚卵のような小さな粒をまいたようにみせる金工の技法。「魚々子鑿」という先端が極小の円形になった特殊な鑿を使う。
【筭・割筭】 (こうがい・わりこうがい)	筭は「髪搔」とも書き、乱れた鬘を直したり、痒い部分を搔くための道具。小柄とともに鞘に装着する刀装具としてよく見られる。割筭は筭のように2つに分かれる形状の筭。実際に箸としても使われた。

